

# 狩猟の魅力に関する研究

杉本 龍之介(生涯スポーツ学科 野外スポーツコース)  
指導教員 黒澤 毅

キーワード：狩猟，魅力，獲物

## 1. 緒言

狩猟者の数は1970年の約53万人をピークに2007年には約15万8千人まで減少しており<sup>2)</sup>、高齢化による次世代を担う若手狩猟者の減少や、シカやイノシシによる全国的な農林業被害が深刻な問題となっている。近年では鳥獣保護管理の担い手確保を目的とした狩猟の魅力伝えるフォーラムを、都市部を含む各地の都道府県で開催するなど、狩猟者を増やそうとする取り組みが行政主体で行われている<sup>2)</sup>。

さまざまな社会問題をかかえている現代の狩猟に対して、狩猟者はどのようなことに魅力を感じ、狩猟を行っているのだろうか。そこで本研究では、狩猟者が感じる狩猟の「魅力」を明らかにし、個人属性による狩猟行為を比較検討することを目的とする。

## 2. 研究方法

【アンケート用紙の作成】S県の猟友会に所属する狩猟者2名(男性1名、女性1名)を対象とし、2016年6月21日(火)・23日(木)に半構造化インタビューを行った。そこから得た回答から狩猟に関するアンケート用紙を作成した。

【狩猟に関する調査】2016年10月23日(土)から11月25日(火)の期間に、S県の猟友会に所属する狩猟者63名(男性59名、女性4名)を対象とし、狩猟に関するアンケート調査を行った。アンケートは基本属性と狩猟行為5要因25項目、狩猟者が特に感じる狩猟の魅力25項目の中から3つ選択する形式で回答を求めた。

## 3. 結果及び考察

回答用紙から特に感じる狩猟の魅力3つ選んでもらい回答を求めた結果、10項目「獲物の肉の味・おいしさ」の回答数が最も多かった。行政主体で行われている狩猟の魅力伝えるフォーラム<sup>2)</sup>やNPO法人、個人団体が行っている狩猟のイベント<sup>1)</sup>においても獲物の肉の魅力を感じていることが多い。狩猟者は獲物の肉に魅力を感じており、一番の狩猟の魅力であると考えられる。

「仲間」因子の14項目「チームワークを活かした狩猟」と11項目「狩猟現場での狩猟仲間との交流」の回答数が多く、上田ら<sup>3)</sup>は狩猟を辞めるまで狩猟を続けてきた理由として「仲間との交流」の回答が多かったと述べている。基本属性においても単独で狩猟を行う対象者が16%しかいない。このようなことが「仲間」因子の得点に影響していると考えられる。

個人属性による狩猟行為を比較検討するために対応のないt検定を行った結果、年齢と

狩猟歴では「金銭面」因子に、目的I(獲物を食用としてりようするため)と目的II(獣害を減らすため)では獲物に有意な差が見られた(表1)。

表1 狩猟行為比較(個人属性別)

因子	属性	n	M(SD)	t値	
金銭面	若年層	9	14.44(1.424)	3.866**	
	高年層	17	17.88(3.100)		
	若手	23	17.60(3.486)		2.635*
	ベテラン	21	15.28(2.283)		
獲物	目的I	29	20.65(3.131)	2.253*	
	目的II	15	18.26(3.432)		

\*\*p<.01 \*p<.05

年齢と狩猟歴に有意差が見られた要因として、高年層の狩猟者のほうが、金銭的、時間的に余裕があるためだと考える。また、ベテランである狩猟者は狩猟に十分な時間を費やすことができていると考える。狩猟歴9年以下の狩猟者の中には中年層、高年層もおり、金銭的、または時間的に余裕はあると考えるが、狩猟歴がまだ浅い。ベテラン狩猟者も狩猟にかかる経費を高いと感じているが、それ以上に狩猟にたいして魅力を感じていると考える。

目的別では、目的IIは、目的Iとは違い、狩猟目的が有害駆除のためであるため、捕獲した獲物を食用として利用せずに埋葬していた。よって目的IIは獲物を食用として利用していないため、目的Iよりも獲物に対して魅力を感じていない。よって有意差が見られたと考える。

## 5. まとめ

狩猟者が狩猟をするうえで、特に魅力を強く感じる要因は「獲物の肉の味・おいしさ」と「チームワークを活かした狩猟」であった。狩猟行為では高年層より若年層の狩猟者のほうが、狩猟歴ではベテランより若手の狩猟者のほうが狩猟にかかる経費は高いと感じていることがわかった。狩猟目的別では目的Iと目的IIの「獲物」因子において、有意な差が見られ、目的IIは目的Iよりも「獲物」に魅力を感じていなかった。

## 参考文献

- 1) 畠山千春(2014)：狩猟女子の暮らしづくり、わたし、解体はじめました、株式会社木楽社。
- 2) 環境省：狩猟の魅力まるわかりフォーラム(<https://www.env.go.jp/nature/choju/effort/effort8/>)
- 3) 上田剛平、小寺祐二、車田利夫、竹内正彦、桜井良、佐々木智恵(2012)：日本の狩猟者はなぜ狩猟を辞めるのか？－狩猟者の維持政策への提言－Wildlife Conservation Japan 13, p. 47-57.